

連続講座 カトリック教会の音楽 第1回

永原恵三

はじめに

この連続講座「カトリック教会の音楽」は、2021年に掲載した連続講座「カトリック教会と音楽」を一新して、2025年9月から開始する講座です。内容としては、まずは典礼暦（教会のこよみ）にしたがって、その月の祝祭日を中心にして、カトリック教会の一年間をめぐる。また、個別の教会音楽について記しながら、典礼との関係や第二バチカン公会議後の動きなども考えることといたします。なお、本講座はカトリック教会で用いられている音楽と人間の営みとの関係を考えることが主目的であり、宣教の目的はありません。カトリック教会の内部にいる音楽学者として、そこで用いられている音楽とくに聖歌について、お話しするつもりです。

どうぞよろしくお願いいたします。

1. 典礼暦（教会暦）概観

カトリック教会およびキリスト教の諸教派では、「典礼暦」という暦に基づいて一年を過ごしています。それは一般的な社会生活の暦とは異なっていますが、現代社会においては、たとえば日本という、99%がキリスト教の信者でない社会でさえも、クリスマス（降誕祭）は一年の欠かせない行事となっています。この典礼暦は教会暦とも言われるように、教会での典礼すなわち儀式や儀礼といった、教会という共同体において執り行なわれる行事の暦であるといえます。教会では日曜日すなわち「主日」だけでなく、毎日ミサが執り行なわれています。そして、それらの日が典礼暦上でどのような日として位置づけられているか、によって朗読聖書の箇所や奉献文なども異なっています。したがって、それらに伴う音楽（聖歌）も異なっているのです。

さて、典礼暦は「待降節第一主日に始まり年間第34週の土曜日で終わる、一年間を周期とする暦」であり、「この1年を通してキリストの救いの秘義全体が記念されると同時に、マリアや聖人の記念日が特定の日に組み込まれて構成される」（『新カトリック大事典』第3巻1229頁）とされています。具体的には毎年11月下旬に「王であるキリスト」が祝われて、その週が年間第34週となり、翌日の主日、つまり日曜日を「待降節第一主日」としています。しかし、これらの主日は具体的に毎年何月何日と固定されておりません。その理由は、この暦の基点となっている復活祭が毎年移動するからです。しかし、降誕祭は12月25日と固定されています。カトリック教会においてもっとも重要なこの二大祭日は、一方が移動し、もう一方は固定されているのです。ここには二つの暦の並列がみられます。つまり、復活祭は月の満ち欠けによる太陰暦、そして復活祭は太陽暦に準じているのです。

なお、教会の年末、とくに「王であるキリスト」については、連載講座カトリック教会と音楽第2回（2021年11月）もご参照ください。

2. 復活祭と降誕祭

復活祭は、地球の北半球に住んでいる私たちにとっては、春を告げる行事とも言えます。その日は春分の日と月齢との関係で決まります。毎年、春分の日の後、最初の満月の後に来る最初の日曜日が復活祭と決められています。ご存知のように私たちの暦は太陽暦ですので、月のめぐりとは毎年ずれています。復活祭はしたがって、3月の下旬から4月の中旬にまで毎年移動します。カトリック中央協議会のサイト（https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2024/12/2025tenrei_reki.pdf）で示されているように、2025年の復活祭は4月20日でした。それに対して、2026年度は4月5日でかなり早くなります。この復活祭はカトリック教会（キリスト教諸派においても）でもっとも重要な祭日ですが、日本ではクリスマスの方が目立っているようです。

また、降誕祭の前には「待降節」、後には「降誕節」、復活祭の前に「四旬節」、後には「復活節」という期間がともなっています。「待降節」は降誕を準備する期間で、「降誕節」は降誕を祝う期間です。同様に「四旬節」は復活を準備する期間で、「復活節」は復活を祝う期間です。このように、暦の軸となっている二つの祭日はそれぞれに準備の期間と祝う期間とを持ち、暦のほぼ半分を占めていることが分かります。暦の日付を大きく左右するのは、復活祭であり、これに伴って多くの祭日が移動します。とくに、復活祭後は、主の昇天、聖霊降臨の主日、三位一体の主日、キリストの聖体、と5月から6月にかけては祭日が連続します。そして、一年の終わりの「王であるキリスト」の祭日も移動しながら、一年を巡ってゆきます。

このようにキリストに関係する祭日がある一方で、聖母マリアや聖人の祭日や記念日が一年を通じて祝われます。聖母マリアについては、12月25日の降誕祭の9ヶ月前、3月25日に「神のお告げ」（受胎告知）の祭日があります。他に、「無原罪の聖マリア」（12月8日）、1月1日（神の母聖マリア）、「聖母被昇天」（8月15日）などがあります。聖人の記念日は省略しますが、「諸聖人の祭日」（11月1日）は記しておきましょう。その他については上記のカトリック中央協議会のサイトをご参照ください。

3. ユダヤ暦での一日

私たちの日常社会では、12月24日の夜がクリスマスを祝うときになっていますが、おそらく、12月24日の夜にミサがあることに起因しているでしょう。しかしながら暦の上では、ユダヤ暦の伝統に則って、日没から日没を一日と考えていますので、12月24日の夜は本当は25日にあたっています。ですから、カトリック教会のミサの名称では、24日の夜は25日の「降誕祭夜半のミサ」、25日の朝は「降誕祭日中のミサ」、という位置づけになります。

復活祭についても同様に、復活祭前日の土曜日の夜に行なわれる復活徹夜祭のミサは、「復活祭夜半のミサ」で、昼間に行なわれるのは「復活祭日中のミサ」、とされていて、降誕祭、復活祭、いずれの場合もミサの朗読箇所が異なるので、まったく別のミサとして位置づけられます。よく誤解されるのですが、復活徹夜祭のミサは聖土曜日の夜のミサではありません。こうした位置づけは単に暦や朗読だけの問題ではなく、ミサ自体がまったく別の内容になるので、私たちの主題である、音楽（聖歌とオルガン）においてもはっきりと区別をしておかなければなりません。

そして、この節の最後になりますが、日本はキリスト教の国ではありませんから、こうした典礼暦という教会を中心とした暦には関心がないかもしれません。しかし、初めにも申したように、復活祭はキリスト教のもっとも大きな祝い日であるとともに、その前の四旬節や聖週間（とくに聖木曜日と聖金曜日）は大変重要な時期です。朗読箇所もそして音楽（聖歌）もまたその日に固有のものであり、具体的にはこの時期に演奏される（歌われる）音楽はこの時期だけでしか歌われません。聖歌はどれもいつ歌ってもよい、というものではありません。その日、その時という時間と場所は、日常になればなるほど、切っても切れない関係にあり、私たち音楽学者はそれをコンテクスト（脈絡）との強い関係を持っている、と言います。音楽にとって、それを担う人間にとって、コンテクストが変わること、あるいは変えられる、変化せざるを得ないことは、さまざまな要因で起こり得ることです。それらは人間が生きるその日、その時に大きな影響を与えます。それは現実的な意味で、人間が心して受けとめるべきことです。

4. 9月の祝日と記念日

ここからは、毎月の祝祭日や記念日について音楽との関係から説明してまいります。9月については、祝日を一例、記念日を一例挙げることにします。それは9月14日の十字架称賛と、9月15日の悲しみの聖母です。これらは復活祭に準じて移動する祝日ではなく、毎年同じ日にあたります。今年は9月14日が日曜日にあたりましたので主日の典礼のなかで祝われます。

以後、個別に祝祭日を取り上げる場合には、『聖書と典礼』（オリエンス宗教研究所発行）と『毎日のミサ』（カトリック中央協議会発行）の各号の記事を引用ないし参照いたします。

『聖書と典礼』（オリエンス宗教研究所発行）は毎週の主日（日曜日）及び祭日に行なわれるミサ聖祭で用いられる、聖書朗読の箇所とそれに対応する「答唱詩編」および「アレルヤ唱」（詠唱）、そして、4つの祈願文（集会祈願、共同祈願、奉納祈願、拝領祈願）が掲載された冊子です。また、「今週の聖書朗読」として毎日のミサでの聖書朗読及び答唱詩編アレルヤ唱が掲載されます。さらに、誌面の都合で関連する記事が掲載されることも多くあります。この『聖書と典礼』は毎週ごとにパンフレットのかたちで発行され、ミサ聖祭の時に司祭と会衆各自が共通に参照します。

『毎日のミサ』はその月の毎日つまり、日曜日（主日）と平日（週日）のミサ聖祭で用いられる聖書朗読、答唱詩編、アレルヤ唱（詠唱）、祈願文および入祭唱、叙唱、拝領唱が掲載されています。この冊子は基本的に一ヶ月単位で発行されるもので、毎回のミサで配布されるものではありません。

1) 9月14日 十字架称賛（祝日）

この日は『毎日のミサ』（9月号、47頁）で次のように説明されています。「キリスト者の救いと勝利の希望であるキリストの十字架を思い起こす祝日である」。その起源として、「エルサレムではすでに五世紀から、復活聖堂の献堂を記念する9月13日の翌日に、キリストの十字架を礼拝する習慣があり、これは次第に東方教会全体に広まった。ローマにこの習慣が取り入れられたのは七世紀になってからである」。（同上）

キリストの十字架を礼拝するという点では、一年の流れである典礼暦においては、まず聖金曜日の典礼での十字架の礼拝が思い起こされます。約半年前に祝われた復活祭の前の週の聖金曜日の典礼においてです。司祭が十字架の顕示をした後に司祭、奉仕者、会衆の順に行列して十字架の前に行き、深い礼をして崇敬をあらわします。

しかし、この9月14日の典礼ではとくに聖金曜日のような特別なことはなく、通常のミサ聖祭のなかで関連する聖書の箇所が読まれて、それに相応しい答唱詩編とアレルヤ唱が歌われます。ただ、共通する点があります。それは第二朗読、使徒パウロのフィリピの教会への手紙（フィリピ2・6-11）での文言です。（キリストは）「人間の姿で現われ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げあらゆる名にまさる名をお与えになりました」と語られます。これは若干修正されて、聖金曜日の「詠唱」で歌われます（『典礼聖歌』317）。

今年（2025年）は11年ぶりにこの「十字架称賛」を主日（日曜日）に祝っています。普段は週日（平日）に当たるために、この日の存在が見えづらくなっているので、聖金曜日と「十字架称賛」の日が対応しているのが明確に分かります。

ところで、『聖書と典礼』の7頁に、柴田弘之聖アウグスチノ修道会司祭の書かれた記事があり、教皇レオ十四世の誕生日がこの9月14日で、毎年十字架称賛の祝日に誕生日を祝ってこられたとのこと。今年、70歳になられた教皇レオ十四世に世界の平和を託したいと思います。

2) 9月15日 悲しみの聖母マリア（記念日）

前項と同様に、『毎日のミサ』（9月号、51頁）の説明を引用します。「この祝日がローマ教会暦に取り入れられたのは1814年である。十字架称賛の翌日にあたるきょう、教会は、マリアがイエスの受難のとき、十字架のもとにたたずんで母としてその苦しみをともにしたことを思い起こしている」。

この日の続唱（セクエンツィア）として歌われるのが、《悲しみのマリアはたたずみ給えり Stabat mater dolorosa》として知られる詩と曲ですが、この詩自体は13世紀末に成立した創作詩で、作者には諸説あります。悲しみにくれる聖母への崇敬は13世紀から広まり、美術においても表現されるようになったとされています。なお、トリエント公会議によって続唱が廃止や制限をうけたが、1727年にこの祝日が導入されて、続唱や賛歌となったとする記述もあります（『新カトリック大事典』第3巻、524頁）。いずれにしても、「悲しみの聖母」という題材は、音楽では《Stabat mater》、美術では《ピエタ》というかたちでルネサンスから現代に至る芸術家の優れた作品を生み出す契機になったと言えるでしょう。

本稿では、この日に読まれる聖書のうち、福音朗読を取り上げておきます。二箇所あり、いずれかが選ばれます。ひとつはヨハネによる福音（ヨハネ19・25-27）でもうひとつはルカによる福音（ルカ2・33-35）です。

ヨハネ福音書の箇所は、J.S. バッハの《ヨハネ受難曲》でも歌われる箇所です。ここでは十字架上のイエスのそばに、母マリアと母の姉妹、クロパの妻マリア、そしてマグダラのマリアという3人のマリアが立っています。また母のそばには「愛する弟子」すなわちヨハネが立っていて、ヨハネに母マリアを託す場面がイエスの言葉によって表わされます。イエスが最後の言葉「成し遂げられた」と語る前です。他の福音書ではこの場面は記されておらず、ヨハネ福音書に独自の箇所です。

ルカ福音書の箇所は、イエスが幼いときに、両親によってエルサレムの神殿で聖別を受けた、シメオンという人の言葉が記されています。シメオンは母マリアに次のように語ります。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。――あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです」（ルカ2・34-35）。

聖書のなかで聖母マリアについて書かれた箇所はわずかです。受胎告知に始まり、洗礼者聖ヨハネの母エリザベトの訪問と、その際の「マリアの賛歌」とされる、《Magnificat 私の魂は主をあがめ》、そしてイエスの誕生と上記のシメオンによる預言、群衆の中でイエスが行方不明になったときに心配する母マリア、などがあります。福音書の記述自体では母マリアの様子はほとんど分かりません。それは後の時代の人びとによって想像の中で作り上げられてきたのでしょう。

イエスの最後の場に立会う母マリアの姿を思い浮かべるのは難しいことです。

「悲しみの聖母」という言葉からは、時代によって「悲しみ」に対するさまざまな感じ方が表現されていきます。ただ、聖書の言葉から言えることは、母マリアが

「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」という預言を背負い、他方でイエスはつぎつぎに旧約の預言を実現して、最後に「成し遂げられた」と語ったことです。そこから考えられることとして、母マリアは「悲しみ」だけではなく、むしろイエスとともに「成し遂げられた」その誇らしさを感じていたのではないか、ということです。その背筋はまっすぐで、誇り高くイエスを見つめていたように思います。

